

添削文が語る日本語のスタイル

－（２）言葉の選択と序列－

中川正弘

(広島大学留学生センター・助教授)

0. はじめに

外国人の書いた日本語作文の分析を通して日本語を考えるためにこれまで「文体」という概念を念頭に置いてきた¹⁾。文学研究において、作家の思想など、作品の「深み」ばかりを追求しようとするのではなく、まず作品の表層に焦点を合わせ、その様相からすべてを考えようとする視点があるが、その分析の姿勢を日本語の考察においてもとろうとしたのだ。言葉は匿名のものであれ、それを表した人間とともにある。文法など、言葉の問題について考える場合にも、ただの例文ということではだれのものでもない言葉で考えている時には見えないものが、だれかのものである言葉で考えれば見えると思えたのだ。

作品として実現された作家の言葉にはその言葉遣いのさまざまな特徴を通して無自覚な傾向、言葉に対する確固たる意識などが観察され、文体が像を結ぶ。しかし、一つの文体はそれ自体で価値を持つわけではない。文体的価値は他の作品、他の人間の文体との差異によって生まれる。すると、このような「文体」はおそらく作家の数だけ、人間の数だけあるのだろうし、とても意味あるものとは見なされない微少なものまで含めれば、差異は無限にあるとも言える。

一方、この「文体」という概念の元にある Style は、文学研究という特殊な領域でのみ使われているわけではない。そのままカタカナ書きされ、こちらは実に軽やかにいろいろなところで使われている。この「スタイル」の方は、書き物に限定されることはなく、「語りのスタイル」、「話し言葉のスタイル」とも使える。また、音楽、絵画、建築、ファッションと、どんなジャンルの表現についても、他との違いを語る時、なくてはならない言葉だ。

差異がはっきりと認識され、意味のある価値として確立されている時、そこには選択というあらゆる思考の根本にある行為もその用意ができています。方言、男女言葉、敬語も、確立された差異がスタイルとなり、その間で選ばれるということでは文学における文体と通じているだろうし、軽やかに切り替えられるものであれば、モードや服装のTPOともそれほど違いはないだろう。

一人の言語の総体が別の人間のものと比べられ、一つのスタイルとして認知されることもあるが、それと同時に、一人の人間が言葉を使う中で行うさまざまなスタイルの選択もある。従って、「日本語のスタイル」と言う時、そこには二つの位相、つまり、今述べたよ

うな個人と個人の間での差異の位相と、一人の人間の言語能力において言葉選びを成立させる差異の位相が含まれていることになる。

一方、日本語は他の言語と比べることによって外から見ることもできる²⁾。日本人にとって日本語は空気のようなものであり、その中にはそれがあっても意識されないものだが、その空気がどんな色をしていて、どんなにおいがあるのか知ることができるのは、このような視点に立った場合だけであろう。

1. 外国人の日本語とその添削

外国人の書いた作文がでたらめとも言えるほどに間違いだらけの時、これを書いた者の意識や思考がそのような表層の有り様に比例して異常だろうか。ほとんどの場合、母語によってなされた健全な思考が衣としてまとうべき適切な日本語を見いだせなかつただけだろう。むちゃくちゃと見える日本語は文法や語彙の十分な知識がないため、仕方なく手持ちの語彙の中から選んで作られた日本語だろう。だが、それらのおかしな言葉の組み合わせはどれも偶然生まれたわけではない。書いた人間の知識と意志を反映し、そのようになる必然性があったはずだ。おかしな言葉、意味不明の言葉は私たちの解釈を待っていると書いていい。この「おかしさ」は、個人差、国籍文化の差が特定できるほどではないにしても、言葉選びのクセや構文選びの傾向が指摘できるほどなら、模倣することもできるのだから、そこにスタイルが見えてくる。

本稿では、昨年、**添削文が語る日本語のスタイル(1)完了表現と時制**³⁾で扱った作文と同様、日本人に添削をしてもらっても、書き換えのあまりなかったものを選んだ。文法の覚え違いや書き違い、また語彙の不足や書き間違いのあまり多い作文は、その日本語遣いが正しく直さなければならぬ単なる誤りとのみ感じられやすい。間違いが少なく、小さなスタイルの違いが感じられやすい作文によって、書いた外国人のスタイルとそれを読む日本人のスタイルを考えたい。

【作文例】

私は現在、学生宿舎に住んでいるおかげで、日本人の女子学生と話し合う機会がたくさんある。集まる場所はいつも台所。夕方になると一人ずつ集まって来ていろいろな面白い話を切り出す。恋愛話を初め、芸能人や、歴史や、文化など、様々な話が出てくる。まるで、シンポジウムでも行っているようにみんなが熱心に語り合うのである。どこの国でも同じであろうと思うが、話題の1位を占めるのはやはり恋愛話し。彼女たちは人をまったく意識せずに自分のことを自由に話す。たとえ、親しくない人の前であっても全然気にしない。彼女たちの話を聞いていると、確かな東洋人であるのに考え方は西洋人に近いことが分かる。アジアの諸国ではまだ、なかなか見られない積極性や生き生きしている真の自由さが感じられるのである。韓国の若者たちの場合、表面上では非常に日本と似ているように見えるが、内面を覗いて見ると少し異なっている。確かに人を意識し、日常生活の中で自分の意見表出に制限されることも時々ある。それはたぶん韓国にいまに残っている儒教思想のせいなのかもしれないが、とにかく、真の自由さを求めるにはまだ時間がかかりそうである。

* 下線部は移動、太文字は書き換え、字消しは抹消

(1)

O - 私は現在、学生宿舎に住んでいるおかげで、日本人の女子学生と話し合う機会がたくさんある。

A - 私は現在、学生宿舎に住んでいる。**その**おかげで、日本人の女子学生と話し合う機会が**よく**ある。

B - 私は現在、学生宿舎に住んでいるおかげで、日本人の女子学生と話し合う機会がたくさんある。

C - 私は現在、学生宿舎に住んでいるおかげで、日本人の女子学生**達**と話し合う機会がたくさんある。

D - 私は現在、学生宿舎に住んでいるおかげで、日本人の女子学生と話し合う機会がたくさんある。

E - 私は現在、学生宿舎に住んでいるおかげで、日本人の女子学生と話し合う機会がたくさんある。

F - 私は現在、学生宿舎に住んでいるおかげで、日本人の女子学生と話し合う機会がたくさんある。

G - 私は現在、学生宿舎に住んでいるおかげで、日本人の女子学生と話し合う機会がたくさんある。

(2)

O - 集まる場所はいつも台所。夕方になると一人ずつ集まって来ていろいろな面白い話を切り出す。

A - 集まる場所はいつも台所。夕方になると一人**また一人**と集まって来て、いろいろな面白い話を切り出す。

B - 集まる場所はいつも台所。夕方になると**だんだんみんな**が集まって来ていろいろな面白い話を切り出す。

C - 集まる場所はいつも台所。夕方になると一人ずつ集まって来ていろいろな面白い話を切り出す。

D - 集まる場所はいつも台所。夕方になると**それぞれ**集まって来ていろいろな面白い話を切り出す。

E - 集まる場所はいつも台所。夕方になると一人ずつ集まって来ていろいろな面白い話を切り出す。

F - 集まる場所はいつも台所。夕方になると一人ずつ集まって来ていろいろな面白い話を切り出す。

G - 集まる場所はいつも台所。夕方になると一人ずつ集まって来ていろいろな面白い話を切り出す。

(3)

O - 恋愛話を初め、芸能人や、歴史や、文化など、様々な話が出てくる。

A - 恋愛**の**話を初め、芸能人や**—歴史や、文化**の**話**、様々な話が出てくる。

B - 恋愛話を初め、芸能人や、歴史や、文化など、**実**に様々な話が出てくる。

C - ~~恋愛話を初め、~~芸能人や、歴史や、文化など、様々な話が出てくる。

D - 恋愛話を初め、芸能人や、歴史や、文化など、様々な話が出てくる。

E - 恋愛話を初め、芸能人や、~~歴史や、~~文化など、様々な話が出てくる。

F - 恋愛話を初め、芸能人や、歴史や、文化など、様々な話が出てくる。

G - 恋愛話を初め、芸能人や、歴史や、文化など、様々な話が出てくる。

(4)

O - まるで、シンポジウムでも行っているようにみんなが熱心に語り合うのである。

A - まるで、シンポジウムでも行っているようにみんなが熱心に語り合うのである。

B - まるで、シンポジウムでも行っている**か**のようにみんなが熱心に語り合うのである。

C - まるで、シンポジウムでも行っているようにみんなが熱心に語り合うのである。

D - まるで、シンポジウムでも行っているように、みんなが熱心に語り合うのである。

E - まるで、シンポジウムでも行っている**か**のようにみんなが熱心に語り合うのである。

F - まるで、シンポジウムでも行っているようにみんなが熱心に語り合うのである。

G - まるで、シンポジウムでも行っている**か**のようにみんなが熱心に語り合うのである。

(5)

O - どこの国でも同じであろうと思うが、話題の1位を占めるのはやはり恋愛話し。

A - どこの国でも同じであろうと思うが、話題の1位を占めるのはやはり**恋愛**の**話し**。

B - どこの国でも同じであろうと思うが、話題の**大部分**を占めるのはやはり恋愛話し。

C - どこの国でも同じであろうと思うが、話題の1位を占めるのはやはり恋愛話し。

D - どこの国でも同じであろうと思うが、話題の1位を占めるのはやはり恋愛話し。

- E - どこの国でも同じ**だ**と思うが、話題の1位を占めるのはやはり恋愛話。
- F - どこの国でも同じであろうと思**われる**が、話題の1位を占めるのはやはり恋愛話。
- G - どこの国でも同じであろうと思うが、話題の1位を占めるのはやはり恋愛話。

(6)

- O - 彼女たちは人をまったく意識せずに自分のことを自由に話す。
- A - 彼女たちは人に**聞かれること**をまったく**気にせず**に自分のことを**何でも**話す。
- B - 彼女たちは人をまったく意識せずに自分のことを自由に話す。
- C - 彼女たちは人をまったく意識せずに自分のことを自由に話す。
- D - 彼女たちは人をまったく意識せずに自分のことを自由に話す。
- E - 彼女たちは人をまったく意識せずに自分のことを自由に話す。
- F - 彼女たちは人をまったく意識せずに、自分のことを自由に話す。
- G - 彼女たちは**回りにいる人たちのこと**をまったく**気にせず**に自分のことを自由に話す。

(7)

- O - たとえ、親しくない人の前であっても全然気にしない。
- A - たとえ、**それほど**親しくない人がいても全然気にしない。
- B - たとえ、**それほど**親しくない人の前であっても**あまり**気にしない。
- C - たとえ、親しくない人の前であっても全然気にしない。
- D - たとえ、親しくない人の前であっても全然気にしない。
- E - たとえ、親しくない人の前であっても全然気にしない。
- F - たとえ、親しくない人の前であっても全然気にしない。
- G - たとえ、**あまり**親しくない人の前であっても全然気にしない。

(8)

- O - 彼女たちの話を聞いていると、確かな東洋人であるのに考え方は西洋人に近いことが分かる。
- A - 彼女たちの話を聞いていると、**間違いなく**東洋人**なのに**考え方は西洋人に近いことが分かる。
- B - 彼女たちの話を聞いていると、**確かな**東洋人であるのに考え方は西洋人に近いことが分かる。
- C - 彼女たちの話を聞いていると、確かな東洋人であるのに考え方は西洋人に近いことが分かる。
- D - 彼女たちの話を聞いていると、**確かな**東洋人であるのに、考え方は西洋人に近いことが分かる。
- E - 彼女たちの話を聞いていると、確かな東洋人であるのに考え方は西洋人に近いことが分かる。
- F - 彼女たちの話を聞いていると、確かな東洋人であるのに、考え方は西洋人に近いことが分かる。
- G - 彼女たちの話を聞いていると、確かな東洋人であるのに考え方は西洋人に近い**ような気がする**。

(9)

- O - アジアの諸国ではまだ、なかなか見られない積極性や生き生きしている真の自由さが感じられるのである。
- A - アジアの諸国ではまだ、なかなか見られない積極性や生き生き**とした**真の自由さが感じられるのである。
- B - アジアの諸国ではまだ、なかなか見られない積極性や生き生きしている真の自由さが感じられるのである。
- C - アジアの諸国ではまだ、なかなか見られない積極性や生き生きしている真の自由さが感じられるのである。
- D - アジアの諸国ではまだ、なかなか見られない積極性や生き生きしている真の自由さが感じられるのである。
- E - アジアの諸国ではまだ、なかなか見られない積極性や生き生きしている真の自由さが感じられるのである。
- F - アジアの諸国では、まだなかなか見られない積極性や、生き生きしている真の自由さが感じられるのである。
- G - アジアの諸国ではまだ、なかなか見られない積極性や生き生きしている真の自由さが感じられるのである。

(10)

- O - 韓国の若者たちの場合、表面上では非常に日本と似ているように見えるが、

- A - 韓国の若者たちの場合、表面上では非常に日本と似ているように見えるが、
- B - 一方、韓国の若者たちの場合、表面上では非常に日本と似ているように見えるが、
- C - 韓国の若者たちの場合、表面上では非常に日本と似ているように見えるが、
- D - 韓国の若者たちの場合、表面上では非常に日本と似ているように見えるが、
- E - 韓国の若者たちの場合、表面上では非常に日本と似ているように見えるが、
- F - 韓国の若者たちの場合、表面上では非常に日本人と似ているように見えるが、
- G - 韓国の若者たちの場合、表面上では非常に日本と似ているように見えるが、

(11)

- O - 内面を覗いて見ると少し異なっている。

- A - 内面を覗いて見ると少し違っている。
- B - 内面を覗いて見ると少し異なっている。
- C - 内面を覗いて見ると少し異なっている。
- D - 内面を覗いて見ると少し異なっている。
- E - 内面を覗いて見ると少し異なっている。
- F - 内面を覗いて見ると少し異なっている。
- G - 内面を覗いて見ると少し異なっている。

(12)

- O - 確かに人を意識し、日常生活の中で自分の意見表出に制限されることも時々ある。

- A - 確かに人を意識し、日常生活の中で自分の意見を表に出すことが制限されることも時々ある。
- B - 明らかに人を意識しているし、日常生活の中で自分の意見表出に制限されることも少なくない。
- C - 確かに人を意識し、日常生活の中で自分の意見表出に制限されることも時々ある。
- D - 確かに人を意識し、日常生活の中で自分の意見表出に制限されることも時々ある。
- E - 確かに人を意識し、日常生活の中で自分の意見表出に制限されることも時々ある。
- F - 例えば、他人を意識し、日常生活の中で自分の意見表出に制限されることも時々ある。
- G - 確かに回りにいる人を気にして、日常生活の中で自分の意見を素直に表現することができないことが時々ある。

(13)

- O - それはたぶん韓国にいまに残っている儒教思想のせいなのかもしれないが、

- A - それはたぶん韓国にいまに残っている儒教思想のせいなのかもしれないが、
- B - それはたぶん韓国にいまに残っている儒教思想のせいなのかもしれないが、
- C - それはたぶん韓国にいまに残っている儒教思想のせいなのかもしれないが、
- D - それはたぶん韓国にいまに残っている儒教思想のせいなのかもしれないが、
- E - しかし、それはたぶん韓国にいまに残っている儒教思想のせいなのかもしれない。
- F - それはたぶん、韓国にいまに残っている儒教思想のせいなのかもしれないが、
- G - それはたぶん韓国にいまに残っている儒教思想のせいなのかもしれないが、

(14)

- O - とにかく、真の自由さを求めるにはまだ時間がかかりそうである。

- A - とにかく、真の自由さを求めるにはまだ時間がかかりそうである。
- B - とにかく、韓国人が真の自由さを求めるにはまだ時間がかかりそうである。
- C - とにかく、真の自由さを求めるにはまだ時間がかかりそうである。
- D - とにかく、真の自由さを求めるにはまだ時間がかかりそうである。
- E - とにかく、真の自由さを求めるにはまだ時間がかかりそうである。

- F - とにかく、真の自由さを求めるにはまだ**もう少し**時間がかかりそうである。
G - とにかく、真の自由さを求めるにはまだ時間がかかりそうである。

2. 添削における修正と無修正

全般的に修正率が低く、書き換えも小規模だ。7名中ひとりふたりしか書き換えていない文が多い。添削した者が何人も手を付けないでいるものは元のままでも正しいと言えるのだろう。この作文を書いた者を含め、留学生、また日本人学生に聞いてみても、一人しか書き換えていない時、単にそこで使用可能な類義表現がポロッと出ただけで、添削した者7名のうち6名という、圧倒的多数が**承認**していれば、ただ正しいというだけでなく、この文脈で適切で、日本語として標準的なものは書き換え前の方だと考えたようである。しかし、この修正と無修正の比率がこの文脈における選択項目の適切性、蓋然性の序列を意味しているわけではない。

添削文の分析を行う授業には日本人学生も4人出ている。そこで、例えば(1)で「・・・に住んでいるおかげで、・・・機会がたくさんある。」と書かれているようなことを自分が書くとすれば、ひとり書き換えたものと、6人が承認しているもののうちどちらを使うかと彼らに聞いてみた。すると、それまで留学生達と同じように6名対1名という比率からこの文は元のままでよいとしか思っていなかったのであろう、皆しばらく考え込んだ。そして、ひとりが「元のままでいいのですが、自分が書くとすれば、書き換えで使われたほうを選びます」と答え、他の3人も同じだと言った。すると、留学生達は驚いたようだった。書き換えのある／なしの比率が6名対1名と、書き換えなしが圧倒的多数派であったのに対して、その場で全員が書き換えを支持したのだから当然だろう。

ここで問題なのは言葉の類義性だけではない。その序列が関わっている。私たちは普通、作文の添削を頼まれてもしなければ、他の人が使ったことばが変だと感じて、それを直したり、他のものに換えたりしようとはしない。自分のことばと違っていれば、それがその人のスタイルだと考える。出身、環境、性格などを解釈することもあるだろうし、自分や他の人のスタイルと比べ優劣を考えたり、好き嫌いを感ずることもあるだろう。しかし、それをはっきり口に出して、変更を迫ることなどはまずしない。お互いに相手の個性を尊重していれば、何事もそのままに受け入れ、ことばのスタイルの強制などせず、どんな変更もその人の自発性に委ねるのではないだろうか。

添削を依頼された者が手を付けていない時、だからといって元の文で使われていた表現が一番いい選択と判断されたわけではない。もちろん、確認を取って回ったわけではないから、元の表現がいいと判断している可能性もないではない。しかし、先にも考えたように、一般的に自分のスタイルの強制となるようなことは避けようとする傾向があるとすれば、添削によって出現した類似表現の間には、正／誤という二極でも、多数派／少数派と

いう二分法でもない曖昧な関係があるということだ。何も書き換えられていないところ、そこには**それが最適である／最適ではないが正しいものとして許容できる**という、言ってみれば当たり前の二つの解釈の可能性が置かれたことになる。許容における個人差、これも消極的なものではあるがスタイルと言えるだろう。

3. 日本語における構文の選択とスタイル

(1)において構文の取り方が元のものと同じ書き換えでは違っている。

- O - 私は現在、学生宿舎に住んでいるおかげで、日本人の女子学生と話し合う機会がたくさんある。
A - 私は現在、学生宿舎に住んでいる。**その**おかげで、日本人の女子学生と話し合う機会が**よく**ある。

この二つをざっと比べると、かな二文字分でしかなく、複文で書かれていたものが二文に分けられただけである。作文の冒頭で収まりがいいのはどちらか、参考までに意見を聞いた日本人学生四人全員が書き換えで出された単文の方が望ましいと答えた。とはいえ、これは好みの問題にとどまるだろう。

さて、この文にはもう一つ、もっと簡単な書き換え方がある。

- O - 私は現在、学生宿舎に住んでいるおかげで、日本人の女子学生と話し合う機会がたくさんある。
a - 私は現在、学生宿舎に住んでいる。おかげで、日本人の女子学生と話し合う機会が**よく**ある。
A - 私は現在、学生宿舎に住んでいる。**その**おかげで、日本人の女子学生と話し合う機会が**よく**ある。

aのようにすれば、句点のみの書き加えで構文が変わってしまう。つまり、日本語では語彙要素を用いずに構文が変えられるということだ。これは、次のような接続詞でも同じだ。

- S - 私は現在、学生宿舎に住んでいるが、日本人の学生と話す機会はあまりない。
T - 私は現在、学生宿舎に住んでいる。が、日本人の学生と話す機会はあまりない。
U - 私は現在、学生宿舎に住んでいる。**だが**、日本人の学生と話す機会はあまりない。

このように、かろうじて句読点によって示されるだけになるのだから、日本人が文章を書く時、語彙として数えられる以上の選択肢があるということだ。一方、外国人の書く日本語作文には(1)の元の文がそうであったように、従属節として繋ぐ、複文形式が使われやすいようだ。

ところが、日本語では単文なのか複文の従属節なのか曖昧になる場合もある。上の二組の例文をです・ます体に変えてみよう。

- O' - 私は現在、学生宿舎に住んでいるおかげで、日本人の女子学生と話し合う機会がたくさんあります。(○)

- O' - 私は現在、学生宿舎に住んでいますおかげで、
日本人の女子学生と話し合う機会がたくさんあります。(×)
- a' - 私は現在、学生宿舎に住んでいます。おかげで、
日本人の女子学生と話し合う機会が よくあります。(○)
- A' - 私は現在、学生宿舎に住んでいます。そのおかげで、
日本人の女子学生と話し合う機会が よくあります。(○)
- S' - 私は現在、学生宿舎に住んでいるが、日本人の学生と話す機会はあまりありません。(×)
- S'' - 私は現在、学生宿舎に住んでいますが、日本人の学生と話す機会はあまりありません。(○)
- T - 私は現在、学生宿舎に住んでいますが、日本人の学生と話す機会はあまりありません。(○)
- U' - 私は現在、学生宿舎に住んでいます。ですが、日本人の学生と話す機会はあまりありません。(○)

日本語では、構文を複文にとった場合、従属節では、O'のようにです・ます体としないのが普通になっている。従属節にもです・ます体を使う日本人がいないではないが、これを標準的とは見なしがたい。一方、「～が」による従属節ではどうだろうか。こちらでは「～いますが、～ありません。」と従属節にもです・ます体を使い、合わせるのが普通ではないだろうか。

文末調子の整え方は、作文の指導でも必須と言えるほどだが、外国人の日本語作文を読んでいると、文末調子の統一がとれるようになっていても、です・ます体で書いている文章の従属節にまでです・ます体を過剰に使う傾向が出てくる。上の例で言えばO'のようにである。ただし、先にも触れたように、これは許容できないとまでは言えない。文末調子の整え方はです・ます体／だ・である体（普通体）のどちらかに統一するように、つまりどちらかを排除するように指導するのが普通なので、です・ます体で書く時どうしても標準的な日本語よりです・ます体過多になるのだろう。

統一すべきものとしか説明していなければ、どうしてもそうなりやすい。しかし、そもそも、文末調子がでたらめになるのは、です・ます体で書かれた文章とだ・である体で書かれた文章の二種類を読んでいるためだけではないだろう。です・ます体の文章の従属節中で普通体が用いられているのをかなり見るのだから、その経験こそ二つのスタイルの混用が可能だという感覚を植え付けるように思える。「排除」によって文章のスタイルを統一するという側面が確かにあるが、二つを組み合わせることで構文が整えられるという側面も忘れるわけにはいかない⁴⁾。

日本語の教科書がほとんどです・ます体で書かれ、文法でもこれを標準と扱おうとすることで、「する／行く／来る／・・・」の形を辞書形、不定形として二次的なものとする外国人が少なくない。次のような文を見ると、日本人の日本語のスタイルの零度が普通体にあり、です・ますが付加的要素であることを明確にする必要を感じる。

私はヨーロッパに住んでいる時、「ヨーロッパ人の話し方はおかしいですね」と思いました。
私は、~~私~~がヨーロッパに住んでいた時、ヨーロッパ人の話し方はおかしいな　　と思いました。

さて、この例文とも共通の問題だが、(1)の文で見かけ上「私は」は元の文と書き換えて同じだが、係り方は違う。

- - 私は現在、私が学生宿舎に住んでいるおかげで、日本人の女子学生と話し合う機会がたくさんある。
- A - 私は現在、学生宿舎に住んでいる。そのおかげで、私は日本人の女子学生と話し合う機会がよくある。

複文で書かれた○では文末の「機会がたくさんある」に係るが、Aでは単文の文末「住んでいる」に係る。○では従属節の「住んでいる」の主語が略され、◎では第一文の「私は」が第二文の頭で繰り返しになるため略されていると考えられるべきだろう⁵⁾。つまり、日本語の構文選択には接続語彙だけではなく、句読点による文の切れ、文末スタイル、助詞の選択、繰り返し要素の省略が複合的に関わっているということだ。

4. スタイルの拡散

(2)では、「一人ずつ集まってきて」が「一人、また一人と／だんだんみんなが／それぞれ」と3名が書き換えている。4名が承認しているのだから「一人ずつ」も間違いとは言えないようだ。しかし、書き換えが3つ出てくるのは、元のままでは何か抵抗が感じられるのだろう。

これらの書き換えは微妙に意味が違っていると思えるので、意味の相似と相違についてまず確認しておこう。添削において書き換えることで提案される言葉の多くは書き換え前の元の言葉と意味が大なり小なり違っている。厳密に言って、完全に同義になることはない。はっきりと正／誤の判定がつく場合でも、使い分けるとまで言いにくいほど微妙な意味の違いしかない言葉の場合でもそれは同じだ。

しかし、朱書きで抹消され書き込みがされている「語」や「句」をその水準で、つまり書き換え前と書き換え後で入れ替わったものだけを見るのではなく、それらが含まれる「節」、「文」という上位の単位の中で見るとどうだろう。書き換えられた語とそれを取りまく書き換えられていない語で作られたまとまりの内容は、変わっていないのではないだろうか。

添削は内容を変更するために行うのではない。何か異常や歪みのある文章から理解、あるいは解釈、推理できた内容をそのままに、ことばの表層に見られる異常や歪みをなくすために行う。添削でほとんどすべての言葉が書き換えられることもある。また、一語だったものが何語にも長くなったり、逆に何語もあったものが一語になってしまったりもする。しかし、それは表層にある言葉がそぐわないため読みとりにくかった「深層」の内容を表層から抵抗なく容易に読みとれるようにしようとするだけで、「深層」の内容、つまりその

文章を書いた者が書く行為以前に行った思考や主張を变形するためではない。

書き換え前と書き換え後の内容がほぼ同じで変わっていないのであれば、この内容を表す二つの言葉、書き換え前の言葉と書き換え後の言葉の間には、その事例においてしか有効ではないにしても、確かな類義性があることになる⁶⁾。そして、この類義性は視点を語から句、句から節、節から文、文から文章と大きく取れば取るほど、つまり文脈を汲めば汲むほど強く感じられる。

外国人の書いた日本語作文の場合、言葉の覚え間違い、完全な誤解から、文意が表面的には正反対になってしまっていたり、文脈を見ないでは意味不明となっている場合がある。しかし、解釈、推理の糸口が何かあれば、表そうと意図されている「深層」の内容が理解できなくもない。添削をしている者が元の言葉を抹消し、書き換えに使う言葉が頭に浮かんだ時、それは異常な表層と正常な深層の二つの層を捉えた時だ。時には意味が正反対の言葉で書き換えるだろうが、だからといって、内容を正反対に変えようとしているわけではない。

表層と深層の二つの意味が関わる現象ということでは、隠喩をはじめとする比喩のレトリックと比べることができる。例えば、「ジュリアス・シーザーはライオンだ」という文で考えてみよう。これを、ローマ皇帝シーザーは人間なのだからライオンと表すとおかしい、間違いだという者はいないだろう。「ライオン」は「勇者」の意味で用いられた隠喩だと理解する。

表層に置かれた言葉が、文脈との整合性を欠き、文字通りには理解できない場合、私たちは文脈の指示を頼りに、この言葉の奥に、書いた者が伝えようとした深層の内容を読み取ろうとする。この例で、ジュリアス・シーザーが人間ではなくライオンの名前であれば何も問題はない。しかし、この文がローマ皇帝シーザーについて語られていることを文脈が示していれば、「勇者」であると表すために「ライオン」のイメージを借りたのだと理解する。

このような表現が選ばれた時、またこれが読んだ者に理解された時、二つの言葉「ライオン」と「勇者」は意味が違っていながら等価なものとなったのである。

隠喩は類似性によってつながる二つの言葉の間で起こるものだが、この類似性という関係を考えるだけでこの意味現象の重要な一面を忘れてはならない。「勇者」を「ライオン」のイメージで表す隠喩は月並みと言えるほど定型化しているが、この二つの言葉は類義語と言えるだろうか。二つは意味の隔たりをそのまま、これらを等価と扱う文脈の力によって類義表現となっているだけだ。文脈から切り離されれば、この二つの言葉はやはり大きな距離をその間に持っている。どんな比喩にも共通の構図、それは意味の異なる二つの言葉を等価としてしまう力学によって打ち立てられている。

必ずではないが、隠喩などのレトリックには表現を美化するという積極的な意志が言葉の選択に働いている。一方、外国人の書いた日本語作文の添削でとんでもない間違いが書き直されているような場合、書いた者は当然間違っているという自覚なく言葉を選んでいる。そして、ほとんどの場合、直されたものを読んで、自分の考えに似ている、つまり、とんでもない間違いだと指摘を受けた元の言葉と書き直された正しい言葉は似ていると感じるに違いない。だから、書き直されても、何が違うのか分からず、ただスタイルがちょっと違うだけで、実質的には同じではないか、自分の使った言葉のままでもいいのではないか、あるいは自分の使った言葉のほうがいいのではないかと、質問、反論したくなることも多いはずだ。

(2)の例に話を戻すと、元の「一人ずつ」と「一人、また一人と／だんだんみんなが／それぞれ」には類義性がある。だが、これらの言葉を入れ替えると、文脈から理解される状況で微妙に関心点が変わるように思え、どれを適切と判断するかで選ぶことになるだろう。筆者自身は「一人、また一人と」が最も適切と感じていたのだが、日本人学生4名に聞いてみると、これは自分たちの選択肢に入らず、「だんだんみんなが」、「それぞれ」あるいは元の「一人ずつ」がいいと意見は分散した。

5. 省略と序列

(3)の書き換えの中に「芸能人や、歴史や、文化など」を「芸能人や歴史、文化」と直したものがあつた。これも7名中6名がそのままにしてあり、元のままで間違っているわけではない。しかし、ここでも6対1という数値を選択肢の序列と見るべきではない。日本語の教科書では文法の範囲内で、「AやBやCなど」を定型として扱うだけだが、日本人がまどろっこしく感じるためだろう、これをそのまま全部使わないことが多いのではないだろうか。その時、どのような省略の仕方がするのか考えてみよう。

教室で留学生にこれを省略して使ったことがあるかと聞くと、頷く者は一人もいなかった。一方、日本人学生に聞くと、皆、省略するのが普通だと答える。そこで、どのような略し方をしているかとさらに聞くと、普段意識していないのであろう、少し考え込んでから、ここに1例のみ現れた書き換えと同じく、最初の「や」のみを使い、2番目の「や」、「など」は略すことが多いように思うと口をそろえて答えた。使っている、あるいは使える略し方をまとめると次のようになる。

AやBやCなど	AやBやC
	AやB、C (など)
	A、B、C (など)

ついで、参考のために同様の反復を含む「AとBとCと」について聞いてみると、略し方は変わらない。

AとBとCと	AとBとC
	AとB、C
	A、B、C

どちらの場合も、すべて省略し、読点だけでかまわないとも感じるが、意味の違いを表しつつ省略するなら、英語のA, B and Cのように前方省略で後方のみ残すのではなく、第一のものだけを残し、後を略すのが普通だ。

このような使い方を省略と感じるのは、「AやBやCなど」、「AとBとCと」のようにすべて用いるものを定型の全体と感じているからであろう。つまり、最初に現れる一部によってこれを含む全体を表そうとしていることになる。これは他の様々な省略語法とともに、レトリックの分類において最も基本的な比喩と見なされる提喩(Synecdoc)の系列に属するものであろう⁷⁾。

表現の「全体」が定型として認知されている場合、省略の行われていることは誰の目にもそれとわかる。しかし、定型と意識されていないようでも、部分による全体の提示はいたるところに見られる。

日本語が曖昧だという例によく取り上げられる「どうも」などがそうだ。この言葉には「ありがとう」と「ごめんなさい」という全然別の意味があるというような言い方がよくされる。もしそうであれば、実に不可解な言葉だということになる。しかし、これは「どうもありがとう」と「どうもごめんなさい」の一部である「どうも」が文脈に助けられ、この全体を代表指示することによって感謝や謝罪を表しているだけであり、この言葉自体はそのような意味を持ってはいない。この言葉が部分として、感謝と謝罪という異なる意味の全体を代表することができるのは、無意味と言えるほどにそれ自体の意味が稀薄だからとも思える。⁸⁾

6. 選択の零度

(7)において7名中3名が「親しくない」に「それほど」、「あまり」と副詞を加えている。副詞の意味の違いがどうこうと言う前に、そもそもどうしてこのような副詞を加えるのか考えるべきだろう。元のまま何も付けなくても別に文法違反があるわけでもなく、意味も明瞭だ。なのに、わざわざ付け加えているということは、この形容詞を単純な形で用いてはいけなと感じたのだろう。これは裏返して言えば、何か足りなかったのではなく、こういう反応をさせるものが何かあったということだ⁹⁾。

親しくない
それほど親しくない
あまり親しくない

主観的な判断を表す形容詞、例えば「よい／優しい／おいしい／若い／きれい」などは否定しなくてはならないとき、「よくない／優しくない／おいしくない／若くない／きれいではない」と単純な形で使うことを避け、「あまりよくない／あまり優しくない／あまりおいしくない／あまり若くない／あまりきれいではない」という具合に弱めることが多い。

このような言葉を選んでいるからと言って、「ちょっといい」、あるいは「ものすごくというほどではないけれどいい」と肯定的な判断と等価にしたわけではない。判断が肯定的であるのなら、当然肯定形を選ぶはずだからである。このように否定形を使っているのは、やはり否定的に判断している時だ。

そこで、日本人学生に「3人の添削者はどうして書き換えたと思うか」と聞いてみた。すると、口をそろえて、「親しくない」と単純に書くと、非常に強く、冷たく感じるからだろうと答える。つまり、表されている内容を変えるという意識はなく、ただ、表現の表面的な印象を穏やかにするために書き換えることがあるということだ。とすれば、副詞が付いていようが付いていまいが深層における内容は同じなことから、これらは単なる類義表現と見ることができる。

日本語では「とてもいい」の否定形を「とてもよくない」とはしにくく、「あまりよくない」としている。「よくない」はこの形容詞の否定形の構成と形態の単純さから使いやすいためであろう。「悪い」を使えば強すぎると感じられるような時、穏やかな代替表現としてよく使われる。そのため、「とてもよくない」と使えば「とても悪い」と同じで not very good ではなく very bad を意味することになってしまう。

否定要素の係り具合が少し違う日本語と英語では形態と意味のシフトも違ってくる。外国人に日本語を教える場合にはその外国人に理解しやすくなるよう文法事項の様々なシフトが組み替えられる。これは学習者に合わせた有効な対処法でもあるが、日本語を変えようとする外からの圧力でもある。既に考察したように、英語のような標準と見なされる言語の文法体系は日本語文法の記述を隠然と規定する¹⁰⁾。

さて、ここに見るような表現を弱めるだけのレトリックとも言えないほどの目立たない言葉遣いは日本語に固有というものでもないだろうし、日本人でもこのような形容詞の単純否定の使用に抵抗がない者も少なくないだろう。そこで、もう少し制度性の強い言葉を例にこのような書き加えについて考えてみよう。

ホームステイをした家のご夫婦は

O - 有名なフランスのレストラン食事に連れていった。

A - 有名なフランス のレストランに食事に連れていってもらった。

B - 有名なフランス料理のレストランに食事に連れていってもらった。

C - 有名なフランス料理のレストランへ食事に連れていって下さった。

D - 有名なフランス のレストランへ食事に連れていってもらった。

E - 有名なフランス料理のレストランに食事に連れていってくれました。

F - 有名なフランス料理の店に 連れていってくれた。

G - 有名なフランス料理のレストラン食事に 連れていってもらった。

	形態	意味
連れていった	0	-1
連れていってくれた／もらった	+1	0
連れていって下さった／いただいた	+2	+1

これは別の作文からの例だが、元の文の「連れていった」も日本語として使えなくはない。これを選んで書いた留学生も、一番短く、意味の構成の単純なものがこの表現選択の序列では零度にあると考えたのだろう。「くれた」、「くださった」は感謝の表現としてつけ加える語彙要素であり、出来事を客観的に扱うだけなら「連れていった」を使うだけでいいと判断しておかしくない。歓待してくれた夫婦に対する感謝の気持ちは文中にいろいろな形で表してあり、ちゃんと「くれた／もらった」を使っている箇所も数カ所あった。ただ、出来事一つ一つにこのような要素を付けてはくどくなるので、必要ないと考えただけのようだ。

ところが、日本語で普通使っているとも思えない「フランスのレストラン」を書き直していない者まで含め、添削をした日本人は全員、「くれた／もらった／くださった」を書き加えている。こうなると、選択の零度は一番単純で短い構成の「連れていった」にあるのではなく、「連れていってくれた／もらった」という長く複雑な方にあると言うべきだろう。

言葉の結合形態だけに目が向いていると、何も付けられておらず、単純で短いものが意味要素の数も一番少なく、零度にある、つまり類義表現の選択において標準となると考えてしまう。ところが、この例のように、選択軸に視点を置いてみると、意味の序列は違ってくる。上の例で、「連れていってくれた／もらった」が標準となっているということは単純な「連れていった」には「くれた／もらった」の意味要素が欠けていると感じられるということだ。そして、それが一つの意味になる。添削をした者たちが元の文を読んで感じたはずの「強い」とか「無礼」、「怒っている」という感覚がこのマイナス1の意味である。言葉の表層における長さ、語彙の数は深層における長さ、意味の数と必ず一致するもので

はないということだ。

7. おわりに

本稿では、言葉の選択に関わるいくつかの問題を考えた。しかし、選択だけに考察を限定するというより、そこに視点を置くことでいろいろな言葉の問題を見直すことができると考えた。言語についての研究は一般的にラングという社会的ではあるが単一のシステムとしてイメージされる言語を巡って行われる。また、文学研究のように実現された一人の言語を考察する時、ただ主観に走ればその考察は妄想と変わらなくなるが、その一方で客観に徹するだけでも重要な価値が見えなくなる。言葉について考える時、主観に属するものを客観的だと見誤ることがないように注意しなければいけないが、これを避けようとするもおかしい。個別の言行為の中で無数の主観としてしか存在しえない言葉の実相を捉えるには、そのような条件を棚上げすることなく、限定を付けたまま、凝視する以外にない。

作文の添削をいくつも読み比べた時見えてくる個人言語間の微少な差異は、読み比べている私たち自身の主観の存在を強く感じさせる。そして、スタイルの三つの位相、つまり他の言語との比較において浮かびあがるスタイル、他の人間との比較から見えてくるスタイル、一人の人間の言語使用の様々な局面で選択されるスタイル、これらすべてを同時に垣間みせてくれる。

今回は言葉の選択における序列に焦点を合わせて、恣意的でありながらも制度として強固なものとなる言語の一面を考察したが、さらにいろいろな事例を見て日本語のスタイルを検討したい。(了)

- 1) 中川正弘、**作文の誤りと文体**、広島大学留学生センター紀要、第3号、1993年
中川正弘、**作文の添削と文体差**、『広島大学留学生日本語教育』第7号、1995年
- 2) 参考 BAILLY, Charles - *Traité de stylistique française*, Paris, Klincksieck, 1909.
- 3) 中川正弘、**添削文が語る日本語のスタイル(1) 完了表現と時制**、『広島大学留学生教育』第1号、1997年
- 4) 例えば、次の谷崎潤一郎のエッセイにおける講談調を見ると、文末調子をただ統一すべきものと扱うことに躊躇いを覚える。二つのスタイルのこのような組み合わせには文法、規範ではなく確かに表現が感じらる。このようなスタイルも可能だと確認しても、現在の日本語の標準とは思えないことが、日本語におけるスタイルの幅を示しているのだろう。

「しかしながら、左様に日本語には明確な文法が**ありません**から、従ってそれを習得するのが甚だ困難な訳**であります**。一般に、外国人にとって日本語程むづかしい国語はないと**云われる**。又欧羅巴の国語のうちでは、英語が一番習ふのにむづかしく、独逸語が一番やさしいと**云われる**。それはなぜかなら、独逸語には実に細かい規則が**あります**ので、最初に一通りその規則を覚え込んでしまへば、あとは一々の場合にそれを当て嵌めて行けば**よい**。然るに英語は、独逸語ほど規則が綿密でなく、又、規則に当て嵌まらない例外の場合が**ある**。たとへば文字の読み方にしても、独逸語の方は整然たる規則が**ある**ので、それに従えば知らない文字でも読むことだけは**出来ます**のに、英語の方は、aの字一つでもいろいろに**発音する**。況や日本語になると、読み方などは日本人の間でもまちまちであり、その他総べての場合の規則が、あると云えばあるやうなもの、外国人にも分かるやうに説明せよと**云われる**と、出来ないものが**沢山ある**。西洋人が最も困難を

感ずるのは、主格を現すテニヲハの「ハ」と「ガ」の区別ださうでありますが、成る程、「花は散る」と云うのと「花が散る」と云うのと、明らかに使い道が違つてをりまして、われわれならその場に臨んで迷ふことはありませんけれども、さてそれを、一般に当て嵌まる規則として、抽象的に云えと云えば出来ない。文法学者は何とか彼とか説明を与えて、一応の体裁は取り繕ふでありますが、そんな説明は実際の役に立たない。「でございます」「であります」「です」などの区別も、甚だ微妙であります、理屈では何とも片付けられない。さふ云う次第でありますから、日本語を習ひますのには、実地に当つて何遍でも繰り返すうちに自然と会得するより外、他に方法はないと云うのが真実であります。」

谷崎潤一郎、『文章読本』、中公文庫、1980、p.69-71

- 5) 実際に書かれているわけではない「私は」、「私が」を省略されていると考えることには抵抗を覚えるかもしれないが、次の例のように二つの文／節の主語が異なる場合と比べれば、省略と見るのが妥当だろう。

O - 私は、Aさんがいい本を教えてくれたおかげで、 レポートが書けた。

A - Aさんはいい本を教えてくれた。そのおかげで、私はレポートが書けた。

- 6) 意味について考える者にとってレトリックは重要なカギとなる。さまざまな比喩が、ある言葉の代わりに、意味が似ている言葉だけではなく、意味が遠く隔たった言葉、時に意味が正反対の言葉でも使えることを証明しているからである。本稿では「同義」という言葉を使わない。この言葉はまったく意味の異なる言葉が文脈の指示機能によって意味の等価性を獲得する、そのような作用にこそ当てるべきだろう。
- 7) グループμ、『一般修辞学』(Le Groupe μ, *Rhétorique générale*, Larousse, 1970)を参照。彼らは「部分で全体を表す／全体で部分を表す」提喩(Synecdoque)こそがすべてのレトリックの根本にあると考える。そして、旧修辞学では意味構造の差異から区別、分類されるにとどまった種々のフィギュールを、提喩において部分と全体の間で行われる「削除」と「付加」という基本操作の組み合わせと考えることで新たな分類を行い、レトリックを生成的に記述しているが、このような視点は様々な文法の考察にも有効と思える。
- 8) 中川正弘、**文法におけるパラディグムの諸相**、広島大学留学生センター紀要、第1号、1991年
- 9) 『構造文体論』(Michael RIFFATERRE, *Essais de stylistique structurale*, Flammarion, 1971.)を参照。構造文体論では書かれている言葉の意味以外に何らかの文体的意味の感じられるところは具体的に語によって特定できなくても fait stylistique (文体事実、あるいは文体行為)と見なし、それらの組み合わせ方を検討することで、それぞれの「文体点」が単独でなら生じさせる多様な解釈から正当なものを見分けようとする。これと全く同じように、外国人の書いた日本語作文を読んでいて、書き換えに使うべき他の語が頭に浮かんだり、読み過ごすことに抵抗を覚えるなど、何か感じるポイントは、やはり正当な解釈を行わなければならない構造要素となっている。
- 10) 前掲、中川正弘、**添削文が語る日本語のスタイル(1)完了表現と時制**では時制について述べたように、たとえ媒介言語を入れず、直接法で日本語が教えられている場合でも、学習者の母語や英語のように標準と見なされる言語の文法構造は日本語文法の記述を隠然と規定している。